

Ⅲ 特集：映画館（上映活動）の現状に関する 詳細調査

1

「映画館（上映活動）の現状に関する詳細調査」
について

2

映画館（上映活動）の現状に関する詳細調査

（1）3つの映画館（上映活動）のレポート

（2）レポートを読み解く指標

- ① 上映作品の多様性
- ② 関連イベント—地域性に即した上映活動の教育的・社会的意義
- ③ さらに必要な指標・データ

3

課題と展望

資料 | 全国コミュニティシネマ会議 2024

採録 | ディスカッション

“学びの場”としての映画館Ⅱ：
映画館が「クリエイター」を育成する

Ⅲ | 〔特集〕映画館(上映活動)の現状に関する詳細調査

1

「映画館(上映活動)の現状に関する詳細調査」について

川村健一郎 | 立命館大学映像学部教授

「地域における豊かな映画環境の創造」を目指して、コミュニティシネマ憲章が採択されてから20年以上が経過した。その間に、上映メディアはフィルムからデジタルへと転換し、またNetflixをはじめとする動画配信サービスが広く定着する一方で、映画館での公開本数は約2倍の1,300本程度にまで増加した。映画館への甚大な被害をもたらした東日本大震災やコロナ禍も、この間に起こった出来事である。コミュニティシネマとしての映画館(ミニシアター)は、そうした苦境に晒されながらも、憲章に謳われている「使命」をふまえて、地域における映画環境を豊かにするための活動を着実に続けてきた。

その使命とは、「上映環境の地域格差の是正と上映作品の多様性の確保」、「多様なコミュニティに対する多様な上映機会の提供」、「メディアリテラシーの向上など教育的使命を実現すること」、「地域に対する貢献」の四つである。映画館の社会的機能を研究している東海大学准教授の石垣尚志は、この使命に直接言及しているわけではないが、複数の地方都市のミニシアターの調査をふまえて、これらの使命を、端的に「多様性」と「地域性」と読み換えている(石垣尚志「地方都市における映画文化と映画館」『文化政策研究』7号、2014年、188-190頁)。観客の多様な属性と選好に応じることができるように、製作国やジャンル、時代を限定しない、種々雑多な映画群が上映されていること、地域において映画という芸術表現への学びの場が提供されていること、こうした活動を通じて、地域の様々なアクターとの連携が試みられていることは、ミニシアターの特性として、改めて強調されてよい。

「新しい資本主義」の名のもとに、いわゆるコンテンツ・クリエイターの育成が声高に叫ばれるようになった今日、この使命を顧みることには意義がある。なぜなら、コロナ禍におけるミニシアターの支援に立ち上がり、3億円以上の支援金を集めたミニシアター・エイド基金の取り組みが示してくれたように、映画に関わるクリエイターにとって、ミニシアターは映画文化の多様性を守り、長年にわたって地域文化を育んできた存在であり、世界各国の、また様々な時代の映画を体験させてくれた学びの空間であったからである。

内閣府の「新しい資本主義実現会議」において、是枝裕和監督が「少なくとも今の40代までの監督たちは、このようなミニシアターで多様な映画に触れることで監督になっています。観客も同様に、その体験を核にしてコアな映画ファンを形成してきました」と述べたことは記憶に新しい(「新しい資本主義実現会議(第26回)」https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/atarashii_sihonsyugi/kaigi/dai26/gijisidai.html)。このように、「映画を観る環境」の豊かさを維持していく努力が、クリエイターの育成においても不可欠なのだという教育的視点は、ミニシアターをめぐる文化政策を考えるうえで、これからいっそう重要になってくると思われる。

しかし、実際のところ、各地域のミニシアターは具体的にどのような活動を展開しているのか。ミニシアターはほとんどがいわゆる系列館ではないので、それぞれ独立事業者である。また、基本的に観客に対するチケット売り上げによって経営されているので、地理や人口規模によって、その活動内容も必然的に一律ではない。

コミュニティシネマ憲章の採択を受けて設立されたコミュニティシネマセンターは、2006年度以来、『映画上映活動年鑑』を発刊して、全国諸地域における映画館数(スクリーン数)、上映本数などのデータの集積を進めてきた。これらは確かに「上映環境の地域格差」を計測するために必要な情報であるが、上記のような、個々の映画館の上映活動の質を評価するには適していない。実際に、ミニシアターはどれほど多様な作品を上映し、どのような教育的使命を担ったイベントを実践し、どのように地域のアクターとの連携に取り組んでいるのか。ミニシアターに通い続けている人々には、日常的に体感されていることではあるが、こうした映画館が日々実践している上映活動を一望するデータはこれまで十分に調査されていなかった。

ここでは、改めて、ミニシアターの活動を質的な観点から検討するために、人口が30万人規模の地方都市のミニシアターおよび、都心に近く人口規模も大きい都市のミニシアター、さらに近隣に映画館のない地域での自主上映活動の三つをモデルとして取り上げる。それぞれの活動で1年間に上映された作品の作品名や製作国、公開規模(当該作品が国内でどれほど多くの館で上映されたか)、ゲスト招聘を含む関連イベントの有無などを一覧で示すことで、地域における上映活動の「多様性」と「地域性」を計測することができるようになるだろう。この調査は入口にすぎず、全国のミニシアターの協力を得ることができれば、今後は、空間的にも時間的にも、その対象を拡張して、データを集積していくことを試みたい。